

東黒野

昭和二十八年十月八日第三種郵便物認可(毎月一回五日発行)
平成二十二年一月五日発行 第六十五巻第一号

(通巻七六一号)

東黒野

すぐろの

1月号 (通巻761号)



芒原

小川玉泉

下枝なき松亭々と秋夕焼
ばら園の鳩足元へ秋日和
色いろいろ湾を縁取る秋灯
人を呑み人を吐き出し芒原

夕闇のにはかに深み雁渡る
日の丸の目に染む船尾秋深む
秋寂びぬ鉄鎖の太き氷川丸
土器を呑み込む谷や薄紅葉
矢狭間の切り取る視野の山紅葉
団栗や方一尺の木椅子打つ
湖風に穂穂孕み古戦場
波音の眠りを誘ひ月の湖

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

恙妻

田中臥石

昏睡の妻見つつ秋夕日受く
秋麗や血色戻る妻の顔
まだ風呂に入れぬ妻やちちろ虫
熱き茶を欲してふ妻や秋徼雨
猫じゃらし戯れぬたる恙妻
死の淵を見してふ妻や寝待月
雲流る刈田の涯の上総沖
てのひらの椎の実温し林道
栗強飯炊きて知命を二十過ぐ
一陣の風のコスモス鼬跳ぶ

名月

小野口正江

師の通夜に向ふ車窓や秋夕焼
白陀師忌追ふ如逝かれ正翠師
手の届く所にあらず花芒
名月や四師揃ひて見し日あり
凄まじや月光夫の遺影まで
叢雲より出づる名月見てひとり
一本の芒や団子やはらかに
空き家の庭の芒の穂のゆたか
鈴生りの零余子の宿す夕明かり
束の間の夕日捉へて零余子落つ



秋風

清海信子

新涼や田の一隅に鷺遊び
過去は過去ぶだう一つぶづつ甘し
秋風や水榭は葉をかさね合ひ
湖畔径ゆくに秋風まへうしろ
健脚の口程になし鴉日和
嗅ぎ足りて犬引き返へす露葎
髪刈りし男匂へり秋風裡
月白や松籟池を渡り来る
月今宵わが誕生の日もかくや
草の絮とぶとき海の光りけり

馬肥ゆる

黒滝志麻子

爽籟や幣あたらしき神の杉
一頭の牛遅れ行く大花野
火の山の火の鳥ねむり馬肥ゆる
秋灯の幾百こぼれ摩天楼
かまつかや酒屋の振り大時計
はらからの福耳揃ふ今年酒
山鳩の椎の実こぼす里日和
こほろぎや煤光りせる太柱
小鳥来る寺の要の大銀杏
身に入むや波郷遺品の杖と帽

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

月

大橋伊佐子

釣瓶落とし

岡田史女

桐の実や幾世支へし蔵格子
病む人へ月の障子を開けにけり
月の宴紙のうさぎも侍りをり
手を握るだけの見舞や秋淋し
どの稲架も小さき峡の棚田かな
夕映えや潮目を裂きて鯛の飛ぶ
雁鳴くや比企丘陵の闇緊まる

荒々と風雨過ぎたり南五味子
乾く音立てし魚板や破れ蓮
山風の吹き変りたる吾亦紅
雲晴れて蒲の穂絮の飛ぶ日かな
音読の子の声もるる新松子
望月や癒ゆるきざしの子の腕
曳売りの喇叭へ釣瓶落としかな



秋 思 小倉正穂

山里の寸土余さず蕎麦の花
休み田の荒れしをよそに曼珠沙華
葛の花散るに仰がば樹々ばかり
おむすびの味格別や野路の秋
手より砂こぼしつ秋思深めをり
喪の家の何もなきごと柿熟るる
ぽつり食ぶる袋の菓子や秋の雲

木守柿 乙坂きみ子

秋の蝶草のあはひを漂へり
聖堂の鐘鳴る釣瓶落しかな
吹き降りのあとの青空木守柿
一点の瑕なき秋の深空かな
暮れ際の日差しを捉へ吾亦紅
服薬の一剤増えぬそぞろ寒
恙の身かばふ起き伏し秋深む

座禅堂 菅野日出子

回廊の玻璃のゆがみや新松子
座禅堂にひびく警策秋気満つ
蝮姑鳴くや僧摺り足の座禅堂
客待ちの二頭の栗毛大花野
湖の指呼に展けぬ富士薊
句友より野の花届き月祭る
月代の雲朱鷺色に移りけり

雁 菅野蒔子

野菊咲き近付く喜寿の誕生日
柿実る里や雲なきけふの空
子のメールシスコは今日も霧濃しと
刈り田直ぐ雁の餌場となりにけり
刈り田に餌ついばむ雁をかくまぢか
多羅葉の文託したし月の雁
雁やひとりの夕餉あっさりと

万 仞 集

胡桃落つ落ちては深む森の黙
森清 堯

十人の家族 B 型 天 高し
田村加代

ひとときを眼鏡を外し夜長き
小田嶋野笛

どの山の返す訝か吾亦紅
饗庭恵子

踏み込める畦の一步に湧く蝗
新堀満寿美

飛石はひとりの広さ露時雨
辻井ミナミ

酔芙蓉酔ふこともなく台風過
河野富美子

村営のバスの間遠し昼の虫
中野久雄

生傷を一つ増やして柚子を挽ぐ
鈴木さと子

名月や年毎に増す里心
嵐 弥生

観劇の余韻更なる星月夜	橋場美篤	紫の斑より暮れゆく杜鵑草	青木由芙
身に入むや一遍像の胸うすき	前原マチ	塩茹での香り上総の落花生	及川信二
青天の竹伐る音の響きけり	菊池善江	晴れ三日木犀一樹花こほす	熊切修
単線の下り待つ駅曼珠沙華	山崎稔子	吹き冷ます電車待つ間の走り蕎麦	外山節子
入れ食ひのさっぱ夕日の宙に舞ひ	鍋島武彦	防災の長き訓示や秋暑し	杉本裕子

巨林抄

月光にもらひし種火曼珠沙華	夕月を水田に残し鋤洗ふ	這松とあやなす紅葉高嶺晴	小春日を膝にあつめて研師かな	星空や闇を切り裂く鹿の声	群青の空より青き秋刀魚焼く	身に入むや初めて作る老眼鏡	指折りて秋の七草探しけり	悲話残る秘境に泊つるつづれさせ	唐様の舍利殿の偈や式部の実	秋灯を雨に零して町工場	思ひ草残りの未来濃くあらむ
根本公子	鈴木俊孝	土田亮	栃木志津	芹沢かおる	上月智子	大内由紀	内田梢	澤田澄子	樺澤やすの	中島ひろし	平澤侃